

Program

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van BEETHOVEN (1770-1827)

ヴァイオリン・ソナタ第10番 ト長調 Op.96

Sonate für Klavier und Violine Nr.10 G-Dur Op.96

- I. Allegro moderato
- II. Adagio espressivo
- III. Scherzo. Allegro
- IV. Poco allegretto

ロベルト・アレクサンダー・シューマン

Robert Alexander SCHUMANN (1810-1856)

幻想小曲集 Op.73

Fantasiestücke Op.73

- I. Zart und mit Ausdruck『静かに、感情を込めて』
- II. Lebhaft, leicht『活発に、軽やかに』
- III. Rasch und mit Feuer『急速に、燃えるように』

ヨハネス・ブラームス

Johannes BRAHMS (1833-1897)

ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 Op.100

Sonate für Klavier und Violine Nr.2 A-Dur Op.100

- I. Allegro amabile
- II. Andante tranquillo
- III. Allegretto grazioso (quasi Andante)

—Pause (20分)—

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van BEETHOVEN (1770-1827)

ヴァイオリン・ソナタ第9番 「クロイツェル」イ長調 Op.47

Sonate für Klavier und Violine Nr.9
“Kreutzer” A-Dur Op.47

- I. Adagio sostenuto - Presto
- II. Andante con variazioni
- III. Finale: Presto

プログラムノート

2006年に17歳でパガニーニ国際コンクール第3位を受賞し、19歳からパリを拠点とする正戸里佳が日本での活動を本格化させたのは2017年でした。2018年5月にはドビュッシー、ラヴェル、プーランクのヴァイオリン・ソナタと小品を収録したCD『パリのヴァイオリン・ソナタ集』(キングレコード)でメジャーデビュー。発売翌日には東京文化会館で記念リサイタルを開催し、パリで長く研鑽を積んだフランス音楽で大きな存在感を示しました。そしてその翌月から始まったのが、ピアニスト岡田将との共演による『ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ全10曲3回シリーズ』でした。

99年リスト国際コンクールに日本人として初めて優勝した名手・岡田将は2014年～16年にかけてベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲シリーズに取り組み、また、18年にはチェリスト ルイス・クラレットとの共演でベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲録音に取り組みなど、ベートーヴェンに高い定評があります。

このヴァイオリン・ソナタ全曲シリーズは各回大好評を博し、2019年3月に大成功のうちに完遂しました。シリーズの会場は「神戸新聞松方ホール」と「下関市生涯学習プラザ風のホール」共に西日本の会場でしたが、このデュオをぜひとも東京でもお聴きいただきたいと考え、本日のコンサート開催となりました。

ベートーヴェンのソナタを弾き進めるうちに、二人のレパートリーはブラームスやシューマンにも広がっていきました。本日は、二人が1年半かけて集中的に取り組み、その中で皆様に一番お聴きいただきたいと考え抜いた、選りすぐりの音楽をお楽しみいただきます。

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827)

ヴァイオリン・ソナタ第10番 ト長調 Op.96

ピアノ・ソナタ全32曲はベートーヴェンの生涯にわたって作曲されましたが、それに対しヴァイオリン・ソナタは全10曲のうち9曲が初期と中期に作曲され、後期に作曲されたのはこの10番のみです。ベートーヴェンが42歳の1812年に、フランスのヴァイオリニスト、ピエール・ロードの依頼を受けて作曲されたと言われています。同年には交響曲第7番と第8番が、前年にはピアノ三重奏曲第7番「大公」が作曲されています。

ベートーヴェンがあらん限りの気魄と技法を込めて作曲した第9番「クロイツェル」から9年、またヴァイオリン協奏曲を作曲してから6年、この第10番は平和な安らぎと対話にあふれています。第1楽章、冒頭はヴァイオリンのトリルから始まり、ピアノが同じ音型を繰り返す、二人の対話が始まります。音楽は爽やかに展開していきま。第2楽章は情緒豊

かなメロディがゆったりと奏でられます。切れ目なく続く第3楽章ではまどろみから一転、舞踏的なスケルツォへ。なめらかなトリオを挟んで、舞踏的なリズムで幕を閉じます。第4楽章は変奏曲。幸せに満ちたのどかなメロディが7つの変奏をほどこされ、その中でヴァイオリンとピアノは自由に楽しげに語り合い、次第に昂揚し、最後は静かな回想の後に突然高潮して終わります。

ロベルト・アレクサンダー・シューマン (1810-1856)

幻想小曲集 Op.73

シューマンが幻想小曲集Op.73を作曲したのは1849年。2年前には盟友メンデルスゾーンが若くして世を去り、長男も1歳で早逝しました。またこの49年の秋にはショパンが世を去ります。数年前から精神疾患の症状が出始め苦しいことの多い時期でしたが、一方で妻クララとの間に8人の子供たちが次々と誕生し、様々な困難を重ねながらも音楽活動が広がっていました。作曲様式は円熟味を見せ、作品に深みと哲学的な思索性がもたらされた時期でした。

この幻想小曲集はクラリネットとピアノのために作曲されました。チェロなどの低音楽器で演奏される機会も多いですが、本日は、ヴァイオリンでお楽しみいただきます。自筆譜には「タベの小品集」というタイトルが付けられていましたが、出版の際に「幻想小曲集」と改題されました。3曲から成り、わずか2日間で作曲されたそうです。秘めた感情が静かに奏される第1曲、明るく軽やかな第2曲、華々しい第3曲。各曲には三連符のリズムや動機の関連があり、全体の統一も図られています。曲間をおかず演奏され、曲を経ながら、感情がどんどん高まっています。

ヨハネス・ブラームス (1833-1897)

ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 Op.100

ブラームスが1886年に避暑のためにすごしたスイスのトゥン湖のほとりで作曲したこのソナタは、幸福と安息に満ち溢れています。作曲当時のブラームスは53歳。豊かな自然と親切な人々に囲まれながら作曲にいそみしました。当時好意を持っていた女性の到着を待ち焦がれながら作曲したという逸話も残っています。

のびやかに展開する第1楽章には、ブラームスの歌曲「すぐにおいて」Op.97-5 と、「歌の調べのように」Op.105-1のメロディが引用されているとも言われています。第2楽章の冒頭ではヴァイオリンとピアノがへ長調で対位的な主題を奏で、後に2度、二長調で弾かれます。それはまるで天から光が差し込み、空の色合いが変わっていくかの様です。途中のVivace(生き生きと)では民族的な3/4拍子に変わり、ヴァイオリンによるピツィカートも面白い効果を生み出します。第3楽章では光と風の中に、時折、陰がさし

ます。その世界の果てには哀切が垣間見えます。時に嵐がやってきたかのように劇的に展開しながら、やがて安息の温かな調べにたどり着きます。そして最後には命の輝きに充ちた重音で幕を閉じます。

ブラームスはまだ無名だった20歳の時にシューマン夫妻(ロベルトとクララ)と運命的な出会いを果たします。ロベルトはたちどころにブラームスの才能を見抜き、この若き作曲家を世に出すべく精力的に活動しました。しかしすでに精神を病んでいたロベルトは半年後、ライン川に身を投げ、一命は取り留めたものの精神病院に入院し、その後この世を去ってしまいます。夫を失い失意のどん底にあった14歳年上のクララを献身的に支えたのがブラームスでした。二人は深い親愛の情を抱きあいますが、それはいつしか固い友情へと昇華します。

このヴァイオリン・ソナタ第2番はクララの大的お気に入りでした。クララはこう言っています。「こんなにも私を喜ばせたヨハネスの曲は他にないほどです。長い間味わっていなかった幸せを感じました。」

クララが亡くなった約半年後、ブラームスは後を追うようにこの世を去りました。

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ヴァイオリン・ソナタ第9番

「クロイツェル」イ長調 Op.47

1803年、ベートーヴェンが33歳の時に作曲されました。この前年にはベートーヴェンは悪化の一途をたどる難聴に絶望し、「ハイリゲンシュタットの遺書」を書きました。しかしこの遺書をしたためる中でベートーヴェンは絶望の底から這い上がり、生きようと強く思いました。翌年「クロイツェル」やピアノ協奏曲第3番が作曲され、さらにその翌年には交響曲第3番「英雄」、ピアノ・ソナタ第21番「ワルトシュタイン」が作曲され、作家ロマン・ロランが名づけた「傑作の森」の時期が幕を開けたのでした。

「クロイツェル」は、ベートーヴェンの10曲のヴァイオリン・ソナタの中でも特に壮大で、技巧的にも突き抜けた、ヴァイオリンとピアノが対等に協奏的に弾き合う、革新的な作品です。第1楽章はヴァイオリンの独奏で重厚に幕を開けます。そしてヴァイオリンとピアノが情熱的に掛け合いながら音楽は華々しく展開していきます。第2楽章は変奏曲。第1楽章と一転して穏やかな主題が4つの変奏によって彩られます。それぞれの変奏では巧みに技巧が凝らされ、変化に富んだ華麗な世界を生み出します。第3楽章は躍動するリズムに支配された壮麗な世界です。ヴァイオリンとピアノは丁々発止の掛け合いを重ね、音楽は自由に飛翔し、燦然と輝き幕を閉じます。

コンサートイマジ